

D 17 家庭用学習机・椅子の使用実態と問題点

— 高さ調節を中心として —

広島大学 教育 菊沢康子

目的 戦後最も洋化傾向が顕著な子供室で使用される家庭用学習机と椅子については、メーカ主導型で生産されてきたが、昭和 年頃からそれらについての消費者問題が各地で発生し、最近では学校保健の立場からみて児童の姿勢の悪化が健康上問題となってきたるにもかかわらず、その使用実態についての報告は見当たらない。

このような観点から、今回はこれらの家庭用学習机および椅子の高さの、体位への適合状態に焦点をあてて使用実態調査を行ない問題点を明らかにすることを目的とした。

方法 福山市立小、中、高校生各491, 379, 814人と、国立大学附属小、中、高校生各396, 301, 214人、合計2595人を対象に家庭用学習机と椅子の使用実態をアンケート調査し、同時に昭和55年4月の身体測定時に、身長、座高、下腿高の計測を行ない、それらをもとに各児童の机、椅子の適正高さを算出し、それと実際使用高さとの関係を対比検討した。

結果 (1) 児童は各学年共、学習机は専用化していた。(2) 机は小学校入学時に購入したものを使用している者が過半数を占めていたが、椅子は中学生で約2割、高校生で約6割が途中で買いかえたものを使用していた。(3) 机および椅子の高さ調節装置のあるものは小、中、高校生でそれぞれ、机では81.5%、69.8%、63.1%、椅子では88.6%、85.7%、72.0%となっていたが、過去1年間にこれらの調節装置を用いて高さを調節していない者が約3割あった。(4) 机および椅子を体位に適する高さで使用している者は少なく、平均で机は2~4cm高く、椅子は約2cm高く、差尺は約2cm多い状態で使用している者が多いことが明らかになった。